

コロナで芽ばえた！ 新たな手法を使った 地域福祉活動

新型コロナウイルスの感染拡大により、見守り訪問やサロン活動など、地域福祉活動の中止や制限せざるを得ない状況が続ぎ、ひとり暮らし高齢者や障がい者等の孤立などさまざまなリスクが懸念されています。

今回は、府内の各市町村で取り組まれている、地域のつながりを絶やさない、新たな手法を取り入れた地域福祉活動を紹介します。

ご近所づきあいができる
「魔法のクルマ」

IBARAKI コミュニティ・カーシェアリング

茨木市社会福祉協議会



「あれがしたい！」「こんなことでできないかな...」。

こんな風になんかで思い巡らせ、コロナ前のようにワイワイと楽しく、活気のある地域を取り戻したい。

IBARAKIコミュニティ・カーシェアリングは、そんな願いから生まれたプロジェクトです。

コロナ禍で外出機会や住民同士の交流が減る中、茨木市社協では府の助成金（〇）を活用して地元レンタカー業者から車をリース。地区福祉委員会同士で車をシェアする仕組みをつくり、それぞれの地域でオリジナルティあふれる取り組みが展開されています。

「お買い物の旅へ、レッツ号！」

豊川地区では、「近くにスーパーがなく、買い物不便」という地域住民の声から、買い物支援を考案しました。商

業施設へ送迎する南北2つのルートを組み、3月から週2回の運行を始めています。クルマの名前は「レッツ号」。豊川小学校の子どもたちが名付け親です。

ドライバーは安全運転講習を受けた福祉委員やボランティアで、送迎だけでなく、車中での会話を通じて人と人が心を通わせあう場と時間も生み出します。

橋本和幸福祉委員長は、「たくさんの商品を自分の目で見て、手にとり、買物を楽しんでほしい。課題は運転ボランティアの確保。福祉委員だけでなく、仕事をリタイアした人などにもお助け隊として広く参加してもらえれば」と期待を込めて話します。



運行のようすや利用者へのインタビュー動画はこちらから

あなたの町に、りんりん号がやってくる

一方、玉櫛地区では、出前サロン「り

オンラインで楽しむ！
つながる！

リモボラ (リモートボランティア活動)

柏原市ボランティア連絡会
× 柏原市社会福祉協議会

「離れていても心でつながる」
新しい地域福祉活動のかたち

コロナ禍により、活動の機会や活動場所が無くなり、地域のボランティアも元気をなくしていました。

「コロナ下でも何かできることはないか？」と柏原市ボランティア連絡会と柏原市社協が連携し、動画撮影とインターネットでの動画配信を試験的に始めたところ、市内の社会福祉施設の利用者から「またボランティアさんに会いたい」という多くの声がありました。

こうして、「離れていても心でつながる」新しい地域福祉活動のかたち「リモート・ボランティア活動（通称リモボラ）」がスタートしました。

リモボラでは、ボランティアや保育園の子どもたちがインターネット会議アプリ「Zoom」を通じて施設に入居しているお年寄りへ歌やメッセージを届けるなどさまざま

リモボラ紹介動画はこちらから



な活動が行われています。

コロナ禍でも Goto ボランティア

柏原市ボランティア連絡会と柏原市社協の共催により、3月13日（日）に「エンジョイリモボラ展」が開催されました。

このイベントは、市内4拠点をZoomで同時生中継し、10を超えるボランティアグループが歌体操や演奏、読み聞かせなどの活動をオンラインで披露。動画編集などリモボラの活動をサポートする学生ボランティア「輪」のメンバーが司会やインタビュアーなどを



写真左から、学生ボランティア「輪」代表 西川 奈緒さん、柏原市ボランティア連絡会 会長 坂本 茂人さん、柏原市社協 高林 宏希さん

りんりん号」を運行しています。

『自宅から会場までは遠くでサロンに参加できない人がいる』という以前からの課題と、人数制限や時間制限というコロナ禍で生じた課題を、コミュニティ・カーシェアリングの車が見事に解消。サロンのノウハウをもつて、福祉委員会から住民に近づくと、そこで暮らしが気軽に参加できる場所を創り出すことが可能になりました。

これからも地域のあちこちに出向けば、今まで関りの無かった人たちとつながることができるよう！と福祉委員の皆さんは無数の可能性を感じています。

熱い想いから 優しさまでシェア

プロジェクトの仕掛け人である茨木市社協の佐藤遼さん。大切にしているのは、福祉委員会の皆さんと社協の地区担当者が一緒に創りあげていくことだと話します。

当初、「こんな本当でいいの？」「安全面は大丈夫？」などと心配の声もあがったものの、話し合いを重ねる

中で「失敗してもイヤ。とりあえずやってみよう」と合意形成を図ってきました。

車を通じてみんなの想いをカタチに。地域の熱い想いから優しさまでシェアする車が今日も茨木の町を走ります。

大阪府福祉基金地域福祉振興助成金「ウィズコロナ、ポストコロナ」に対応した地域活動モデルの開発



当日のリモボラ展のようす 離れていても 心でつながるボランティア

務めました。

柏原市ボランティア連絡会会長の坂本茂人さんは、「ボランティア自身の活動したい」という思いを実現し、ボランティア自身も楽しむことを大切にしたい」と開会挨拶。

柏原市社協の高林宏希さんは「リモボラをもっと身近に活用してもらえ

よう仕組みを整え、ひとり暮らし高齢者や外出が難しい方にも届けていきたい」と今後の展開にむけて熱い思いを語ります。

ボランティアの語源にある「自主性・自発性」を大切に、今できるボランティアをできる形でエンジョイ！そんな新しいチャレンジが始まっています。



ご近所にサロンがやってきた！
「子どもやババママ、お年寄りもみんなおいで〜♪」

ZOOM UP! 笑顔 咲かせる人

vol.23

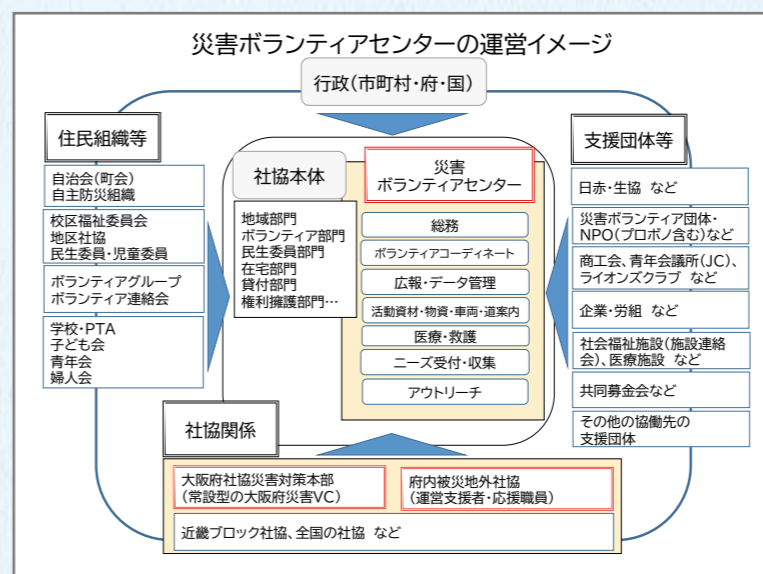
このコラムは福祉の職場で働く人を紹介し、仕事や人の魅力を伝えます。
今回登場するのは、人と“つながり上手な”上殿さん。社協で働くやりがいについて聞きました。



災害ボランティアセンターを常設化 平時からの災害への備えを加速

4月1日、大阪府社会福祉協議会に全国で7番目となる常設型の災害ボランティアセンターを設置しました。

災害対応は発災してから行動するだけでなく、平時から準備しておくことが重要で、災害ボランティアセンターの常設化はかねてから大阪府に対して要望していたものです。
このたび大阪府の補助を受けて実現に至りました。



今回の常設化で専任職員が配置されるなど財政的な基盤が強化されたことにより、これまでの取り組みを安定的に継続できるようになります。

●常設化への期待

平時から災害ボランティアセンターの看板を掲げることで、より多くの方に「社協の災害支援」を知ってもらい、その地域にある市町村社協の災害支援の「受援力」、「支援力」を高め、災害支援基盤を充実させることを進めていきます。
いつか来る大規模災害を想定し、少しでも被災者の役に立てるよう、平時から研修等で社協職員の災害対応力の向上に努めます。そして、社協とともに活動してくれるボランティアや関係団体との連携体制を構築し、その支援の実効性を高めるため、協働の輪を広げていきます。

人が交わる野を創りたい

＊地域を支えたい

大学卒業後、障がい者施設に勤務していた上殿さん。高齢分野も経験したいと社協の地域包括支援センターの非常勤職員として働きはじめました。そこで、支援をうける方が畑でとれた野菜を地域の活動に提供することで協力者として支える側になることを目的の当たりに。

＊つながりがやりがい

共同募金運動ではSNSでの発信、ショッピングモールでの募金活動など、自らアイデアを出し、1年目ながら、どんどん新しいことにチャレンジしています。地域の人や関係機関、職員にも気軽に相談し、つながることで、自分の視野が広がる、そこにやりがいを感じています。

＊同じ目線を大切に

これまでケアプランの作成など個別支援を中心に行っていたため、地域をどう支えたいのかと悩むこともありました。「私たちに相談してほしい」、地域



社会福祉法人 交野市社会福祉協議会 うえの 上殿 詩美さん



にじ丸ちゃん

＊みんなが地域をよくしたい

今後は、子どもたちへの福祉教育で、共同募金や地域活動をもっと知ってほしい、そして親世代や若い人にも参加してもらい、地域がよくなっていくような実感をもっとほしいと考えています。そのため、これからも新しいことに挑戦し、いろいろな人が地域で交わる場をつくっていききたいです。

大規模災害を見据えた協働の輪 「空協」×「社協」災害協定を締結!!

2月1日、大阪府生活協同組合連合会と大阪府社会福祉協議会(以下、本会)との間に「災害時におけるボランティア活動支援に関する協定」が締結されました。

コロナ下での災害支援の現場では、ボランティアの都道府県をまたいだ移動が制限され、地元を中心としたつながりや府域での災害支援団体とのネットワークの重要性が高まっています。

今後、南海トラフ巨大地震など大規模災害の可能性が高まる中、大阪府が被災した場合、被災地域の多くの市町村社会福祉協議会(以下、社協)で災害ボランティアセンターが立ちあがるのが想定されます。社協が被災者のさまざまな災害課



左から大阪府社協田中進常務理事、井手之上優会長、大阪府生活協同組合連合会タン・ミシェル会長理事、中村夏美専務理事

協定の主な内容

- 1 ボランティア活動への参加協力
- 2 災害V.Cの運営に係る人員(スタッフ)の派遣
- 3 災害V.Cの設置・運営に必要な備品、資材及び機材などの提供、貸与、物資の調達への協力など

今回の協定がきっかけで、河内ブロックの12市町村社協(東大阪市、八尾市、富田林市、河内長野市、松原市、柏原市、羽曳野市、藤井寺市、大阪狭山市、河南町、太子町、千早赤阪村)においても、協定が結ばれ、少しずつ「連携・協働」の輪が広がっています。

本会では、災害時、少しでも多くの被災者に寄り添えることができるよう、多団体との連携を強め、平時からの災害支援体制の構築・充実をめざします。

地域で活躍する

民生委員・児童委員さん

NO.36



大阪狭山市 上塚 直子さん (民生委員歴6年)

このコラムは、地域で活躍する民生委員・児童委員(以下、民生委員)さんにスポットを当て、その方の思いを紹介します。今回は、40代から民生委員になった上塚さんにインタビュー。働きながらの委員活動で大切にできたこと、今後の抱負について聞きました。

●母も伯母も民生委員

前任の民生委員と夫が知り合いで、夫の母が地域で活発に活動していたことから話がきました。もともと、九州にいる母と伯母が民生委員をしていたこともあり、いつかは地域で何か携わってあげたいと思い、子育て支援のボランティアもしていましたが、こんなに早く民生委員になるとは思っていませんでした。

●かざってあった手書きのメモ

大阪狭山市では、既往歴や緊急連絡先等を記載した「ひとり暮らし高齢者台帳」を作成。民生委員が毎年更新しています。台帳登録を希望されない方も、買い物帰りに一緒に帰るなどの何気ない関わりからつながりができます。日頃の声かけや見守りなど地域に住んでいる民生委員だか

らできる活動を大切にしています。訪問時に残した手書きのメモを大切に かざってくださっているのをきっかけに、コロナ下でも人とのつながりを感じられるよう、季節を感じる花の写真をつけたメッセージカードを無理のない程度で配布しています。「元気が出た。ありがとう」その言葉が活動の原動力になっています。

●お互いさまの精神

大阪狭山市民児協では、LINEの公式アカウントを作成。部会や地区委員会もLINEを連絡ツールのひとつとして活用しており、活動のしやすさにつながっています。私が働いていることを理解し、地域の方や他の民生委員に助けてもらうことも多いです。そのおかげでこれまで続けてこれました。

地域での見守りは民生委員だけでは限界があります。もっと早く行動していたらと自分を責める悲しい出来事も経験しました。だからこそ、地域の支え合いの大切さを実感しています。ちょっとした見守りから、若い人にもっと地域活動に参加してほしい。お互いさまの精神を大切にこれからも頑張っていきます。

Q 質問数珠つなぎ

Vol.35 水口さんから質問

コロナ下の訪問で工夫していることは?

A 事前に電話するなどコミュニケーションの方法を工夫しています。